対話的な学びを促す漢字学習のあり方とは

「考える楽しさ」を漢字指導に

「繰り返し書く」から「考えて覚える」への転換を。従来の漢字学習のあり方に一石を投じる新しい学習帳が注目を集めている。明星大学教授(元筑波大学附属小学校教諭)の白石範孝氏らのグループが開発した「漢字のとびら」は漢字のポイントを意識させ、考えることで正しい読みや筆順を覚えられる小学校向け教材だ。採用校の取り組みから教材活用のポイントと子どもたちの変容を探る。

漢字の「きまり」知って広がる言葉の世界

漢字の読みと文字の形を教えて何度も書かせる。これまで当たり前のように考えられてきた指導法を脱却し「考える」という視点に立って作成されたのが「漢字のとびら」だ。

形や筆順、読みの「きまり」を論理的に理解できれば、そのきまりを活用して新しい漢字が無理なく学べる。これが「考える」漢字指導のコンセプトだ。

漢字の「きまり」を教えないと子ども達はイメージと感覚で好き勝手に書いてしまう。「覚」の3画目を「賞」のように書いてしまう誤りは、なんとなく全体の形はわかるが漢字の細部に目が届かなくなっている証拠だ。このような状態で漠然と繰り返し学習を続けると、正しい書き方が身に付かないだけでなく「漢字嫌い」を作ってしまう。

漢字嫌いを防ぐためには低学年から漢字の「きまり」に着目させ、考えながら楽しく学ぶ教材が効果的だとの考えに基づき、新たな誌面を構成した。

「漢字の楽しさを伝えたい」と話す執筆者の白石範孝教授(中央)、青木伸生教諭(右)、白坂洋一教諭(左)

見てつかみ 問いで考える

「漢字のとびら」を開いて目を引くのは、新出漢字を提示するスペースに多くの情報が盛り込まれていることだ。漢字の「きまり」を視覚的につかめるようになっている。

漢字の背景はあみかけで色分けされていて、「左右に分かれる漢字は左から右へ書く」「上下に分かれている漢字は上から下へ書く」を認識しやすい。多くの漢字はあみかけ部分と部首が一致するので部首を覚えるのにも役立つ。

「とめ」は○、「はね」は△、「はらい」は□と、共通のマークで書くときの注意を目立たせた。間違えやすいところや筆順を意識させる「問い」もユニークだ。「止めるかな? はねるかな?」「どちらを先に書く?」など、きまりを意識できたかを確認できる。

実際に書かせるのは、きまりを知り、書き順や間違えやすいところを確認した後になる。繰り返し書かせて覚える方法とは発想が違うので、練習スペースはコンパクトに収めた。

思考力を伸ばす活用問題

続く熟語や文の練習ページは「読み」と「書き」の両面からアプローチする。指定された画数をなぞる「書き順名人」「正しい送り仮名が身に付いているかを確かめる「送りがな名人」「間違えやすい字形を示し、正しい漢字を書かせる「書き名人」など、新発想の問題で考えながら解けるようにした。

間違いの例を示すのは「誤って覚えてしまわないか」と敬遠されがちだが、後の実践例を見てもわかるように子どもたちは「何が違うか」「どうしたら合っているのか」を考えるのが大好きだ。確認のために教科書を見直し、辞書を引く場面も自然と多くなる。

漢字の「きまり」を視覚的につかめるように構成された紙面

テスト問題のダウンロードも

1冊の中に力試し問題やまとめ問題、巻末には各ページの解答を掲載した。公式サイトからは、サポートツール」として「定着確認テスト」が無料でダウンロードできる。ミニテストがすぐに準備できるのも便利だ。

漢字のルールがわかると習った漢字を使ってみたいと思うようになる。うまくいくと、まだ習っていない漢字にきまりを当てはめて類推する楽しさが生まれ、授業が活気づく。「考えること」の繰り返しは思考力の土台にもなる。

「考える」プロセスが随所にちりばめられた「漢字のとびら」は子どもたちの漢字学習への意欲を引き出すと同時に、語彙力向上、知識の活用、思考力育成といった次期学習指導要領の目標にも叶う教材と言えよう。

白石式考える漢字学習帳『漢字のとびら』

企画/監修・著 白石 範孝 明星大学教授(元筑波大学附属小学校 教諭)
著 青木 伸生 筑波大学附属小学校 教諭
白坂 洋一 筑波大学附属小学校 教諭

「漢字のとびら」
小学1年生 年間1冊
小学2～6年生 各上・下巻
定価 各440円(税込)

※本教材は、光村図書の教科書「国語」を参考にして作成しています。
※各学年、上下巻ともに「確認テスト」をHP上にご用意しています。ご利用の際は専用のID、パスワードが必要です。
※平成30年度、31年度は、移行措置対応資料をお付けしています。(対象:小学4年生/カラー16P)

内容詳細につきましては、ご審査用見本をご覧ください。ご請求は下記まで

お問い合わせ TEL 03-3304-5314 FAX 03-3304-5010
WEB http://www.next-edu.or.jp

企画 特定非営利活動法人 次世代教育推進機構 for Education of Next Generation
発行・販売 KYO-IKU 教育開発出版株式会社

漢字を使った例文で対話型の授業を実現

高島市立マキノ西小学校

「明るく元気に励む子」の育成を目指し、「喜んで学ぶ学習習慣」の定着に力を入れる高島市立マキノ西小学校(中川和彦校長、児童数74名)。約8年前からオリジナルプリントを使った漢字学習「マ西漢字チャレンジ」に全校で取り組み、読み書き能力の向上を推進してきた。

「マ西漢字チャレンジ」は、現在11級から7段(段は今後も増える予定)まであり昇段テストで80点以上取れれば次の級に挑戦できる。学年にかかわらず進められるので児童の意欲も高い。「わからない言葉は先生にきく」「自分で辞書を引く」約束で、進んで調べる態度の育成も兼ねる。

こうした伝統のもと、漢字学習への意欲が高い児童によりよい教材を、と今年度から「漢字のとびら」を採択した。

1人1漢字を担当して例文を紹介する

自分で考えるから使い方がわかる

「漢字のとびら」の第一印象を教務主任の饗庭信子教諭は「子ども達に繰り返し見せたい『とめ・はね・はらい』がていねいに示されているのが魅力。1ページに4～5の漢字が収録されており区切りがよく使いやすい」と話す。

「書き名人」などこれまでにない練習問題が目を引き、児童はクイズ感覚で取り組んでいるという。ホームページから入手できる「定着確認テスト」を活用し定着度を測る。

授業で活用する際は漢字を使った例文を子ども自身が考え、教員との対話の中から深めていく方法が有効だと饗庭教諭は考える。その工夫が学級担任の腕の見せどころだ。

自分で調べて例文を作る

5年生の久保田淳平教諭のクラスでは黒板にその日学習した漢字について児童が例文を作り紹介した。「招」を担当した児童は「運動会に招待する」「不注意が事故を招く」と音読みと訓読みの両方で例文を作った。

久保田教諭は使い方が合っているかだけでなく合わせて覚えたい漢字も提示していく。

「『招』と似ている漢字に糸へんの『紹』があるけれど、意味はどう違うだろう?」

「人に何か伝えるときは『紹』なんじゃない。紹介とか」「おいで、おいでと手で呼ぶのが『招』だよ」と自由な発言が飛び交う。「そう。だから『招』は手へんを使うとわかるね」と久保田教諭。部首の意味に気づいた児童の発言をクラス全体に共有していた。

「漢字のとびら」を活用した授業で「他の児童の文を写せば『この漢字は○○さんが作った文にあった』と覚えやすい。何より自分の言葉で考えた文が認められると自信がつき楽しく学べる」と久保田教諭は話す。校内研修では全学年で活用法や宿題の出し方などを検討中だという。

中川校長は「読み書きの力はすべての学習の基礎。漢字が読めて書ける、意味が分かり使えることは重要」と語る。今後も独自の漢字学習帳に「漢字のとびら」を併用し読解の基礎力を向上させたい考えだ。

かかわり合いながら考える漢字の授業

栃木市立栃木中央小学校

栃木市立栃木中央小学校(玉田浩校長、児童数562名)は、かしこくやさしくたくましく地域とともに」を学校目標とし、2つの小学校を統合して平成22年度に開校した。

3年前から国語力の伸長に重点を置き、読み取りの朝学習や読書指導など授業改善を図ってきた。玉田浩校長は、語彙力がないと、課題から情報を取りだす読み方ができない。教科学習に必要な"学習言語"を増やすのが課題。反復練習も大事だが、一人でじっくり考える、友だちと学び合う、振り返るといった活動の中から学ぶことを楽しむ子を育てたいと話す。

今年度採択した「漢字のとびら」は、子ども達がかかわり合いを持ちながら漢字を学べる学習帳」と、学習指導主任の稲葉晃一教諭は評価する。

「とめ」や「はね」の間違いを探す「書き名人」問題

6年2組の教室では「新出漢字を熟語で使いこなそう」をめあてに児童が1人1つの漢字を担当し教え合う授業が行われていた。

読みや意味、部首、書き順、熟語や例文づくりまで、その漢字の先生になったつもりで解説する。担当の漢字は事前に決めておき、児童は家庭で「漢字のとびら」の本体を使い準備してくる。

「漢字のとびら」には、とめ、はらいなどの「間違い探し」をするコーナーがあるが、児童がそれを真似してオリジナルの出題ができるのが楽しいところだ。

とめるところをわざとはねる、はらうところをとめて書いてみる。そして「この漢字にはまちがいが2つあります。どこでしょうか」などと問いかける。聞き役の児童もしっかりと漢字を見て考えることができていた。

辞書を引き、熟語の意味を確かめる

児童が先生役になり新出漢字を解説

「熟語づくりは、他の児童が挙げたものを先生役の児童が「正しい使い方かどうか」を判定する。何が出てくるかわからないのでスリル満点だ。

「受納」と出てきたとき、先生役の児童は「はい、いいです」と丸を付けたものの、ほかの児童は意味が分からない様子。その間合いを見計らって担任の増渕里菜教諭はクラスに問いかける。「ちなみに、受納って、どういう意味ですか?」

すると、辞書を引いてわかった児童たちが「受け取って納めること」と、発言し全員が意味を理解する手助けをしていた。増渕教諭はほかにも「延」と似た漢字「廷」を紹介したり、複雑な「衆」の書き方のコツをおさえたりと、児童の解説だけでは不足しがちなポイントに目を向けさせる。

「漢字のとびら」を活用した授業展開は、「友達と教え合いながら学ぶことで、よりわかる、新しい言葉を知る、困っている点が解消される、そんな感覚を持っているのでは」と稲葉教諭は話す。児童が教師の助けを借りつつ、自分たちで教え合いながら漢字を習得していく様子は、"漢字練習=黙々と鉛筆を動かす"というイメージを覆す、新しい授業のあり方を示していた。

学校応援プロジェクト

コンクール、検定試験、出前授業、助成金事業、教員研修…などなど
学校での取り組みに役立つさまざまな教育支援活動の情報を発信!

学校応援プロジェクトでは、企業・団体の教育支援活動の情報をWEBサイトで発信しています。是非ご活用ください!!

学校アンケート実施中! POINT 1
教育支援活動に関する学校の声を受付・公開しています!
学校HPリニューアルの作成、デザイン、教育活動内容の宣伝などをしてほしい
環境整備に支援をいただきたい(例:花の苗や土の提供、樹木の剪定、環境商品の提供など)